

個人部門② 坂本 峰至

《水俣病と水銀研究一筋に「そして世界へ」》

氏名・官職・略歴等	組織の概要等
<p> <small>さかもと みねし</small> 坂本 峰至 環境省国立水俣病総合研究センター 国際・総合研究部長 昭和62. 4. 1 国立水俣病研究センター疫学研究部採用 平成6. 4. 1 同疫学研究部調査室長昇任 平成8. 7. 1 国立水俣病総合研究センター疫学研究部調査室長（組織改編） 平成17. 4. 1 同国際・総合研究部長昇任 平成28. 4. 1 同国際・総合研究部長再任用 【兼務】 客員教授：ブラジル・パラ州立西部大学教授、熊本県立大学環境共生学部 客員准教授：熊本大学大学院医学教育部 編集委員：Env Res（平成26年～）、Pan-Amazonian J Health（平成21年～）、日本衛生学会（平成17-19年） 学会等：日本衛生学会評議員（平成17年～）、国際水銀会議・実行委員会（平成19年～） 【研究費】 科学研究費助成事業代表（基盤C）平成27～29年度、平成23～25年度、平成18年～20年度、厚生労働科学特別研究事業平成15年度 </p>	<p> 環境省国立水俣病総合研究センターは、我が国の公害の原点といえる水俣病とその原因になったメチル水銀に関する総合的な調査・研究、情報の収集・整理、研究成果や情報の提供を行うことで、国内外の公害再発を防止し、被害地域の福祉に貢献することを目的に、環境省が昭和53年に熊本県水俣市に設置した。 </p> <p> 【組織の特色】 水俣病発生地域としての特性を生かした水銀に関する多分野に亘る総合的調査研究を通して、水俣病の教訓・水銀研究の成果を発信するとともに、地域の福祉向上、国際貢献にも努めている。昭和61年より水銀に特化した世界で唯一の研究機関として、世界保健機関（WHO）研究協力センターに指定されており、海外で顕在化する水銀問題に対する調査や共同研究、情報提供を推進している。 </p> <p> 【氏の所掌業務】 組織の幹部として、水俣病・メチル水銀に関する国際的な調査研究の企画・立案・調整及び疫学・環境保健学的研究の総括を行っている。 </p>

顕彰理由

氏は採用後、水俣病及び水銀の調査研究に30年間に亘って、一貫して誠心誠意取組み、世界の水銀研究をリードしてきた。様々なテーマに取組んだが、特に、胎児性水俣病患者の重篤さから、次世代の児を守るためメチル水銀の胎児影響を巡る諸問題を解明することを最重視し、メチル水銀の母親からの高い経胎盤移行性の現象解明や魚介類摂取のリスクと有益性などの研究に顕著な功績を挙げ、政策提言に繋げた（厚生労働省「妊婦への魚介類摂取注意事項」）。更に、WHO等の要請等を通して、世界で広がる水銀汚染現場での問題解決や情報発信にも積極的に取り組んでいる。

理由詳細

1 水俣病に関する調査研究 ～水銀曝露影響の解明とリスク評価への貢献～

氏は昭和 62 年に疫学研究部に採用後、30 年間の長きに亘って一貫して、水俣病及び水銀の調査研究に取り組んだ。また常に社会的重要度が高く、具体的な対策に繋がる調査研究を目標としてきた。赴任当時は、水俣地域住民は依然としてメチル水銀曝露に対し不安を持っていた。最初の研究として、水俣隣接住民のメチル水銀曝露評価調査を行い、住民・水俣病患者の曝露量は日本人の平均といえる値まで低下していることを発表し、地域住民の不安払しょくに貢献した。また、保存臍帯を使って水俣地域におけるメチル水銀汚染の経時的変遷と拡散を研究し、過去に遡る汚染の推移と拡散にかかる貴重な情報を提供した。一方、高濃度メチル水銀汚染が水俣地区の男児の出生性比低下に影響する研究は、水俣病におけるメチル水銀中毒の知られざる局面を証明し、海外からも大きな反響をよんだ。その他多くのテーマ（胎児性患者の日常生活動作の問題点や特徴的な手足の振戦に関する研究等）に取り組んできている。

2 水銀の胎児への影響の調査研究 ～胎児のリスク管理への貢献～

氏は種々の重要なテーマで成果を挙げたが、特に、胎児のリスク管理への貢献が特記される。一連の調査研究において、メチル水銀の経胎盤移行が他重金属に比べ非常に高く、母乳からの移行は低いことを明らかにした。これら成果は、「妊婦への魚介類の摂取と水銀に関する注意事項」（平成 17 年厚生労働省：食品安全委員会が依頼を受け評価実施）において、胎児をハイリスクグループとすること、他方魚介類は胎児にとって有益なドコサヘキサエン酸（DHA）を含むこと、そこで妊娠期間中には DHA に富み水銀濃度の低い小魚の摂食が胎児の脳を守る上で有益であること等の提言に大きく貢献した。これは現在に至るまで妊娠中、授乳中の女性の食生活の重要な指針となるとともに、米国化学会がニュースで取り上げるなど、国際的にも注目された。また、魚介類に含まれるセレン・メチオニンが発達期脳におけるメチル水銀による神経細胞死を防御することを発見し、防御機構の国際的な研究を進展させた。

3 水俣から世界の水銀問題へ ～国際貢献～

氏は WHO 研究協力センターの主要構成員として、WHO からの緊急要請に基づき、水銀に係る健康調査を、キルギスタン（平成 8 年）、カンボジア（同 10 年）、インドネシア（同 16 年）、モンゴル（同 20 年）と各現場に赴き、迅速かつ的確に実施し、問題解決に貢献した。また、JICA 等の海外調査（ブラジル、バングラデシュ、中国）にも数多く参加するとともに、センター主催の国際会議を毎年企画、実施している。更に、平成 28 年 2 月に我が国が締結した「水銀に関する水俣条約」関連では、各国が行った水銀分析値の客観評価を WHO とともに担当するなど、積極的な対応を進めている。

4 公務の信頼の確保、向上

このように、氏は水俣病や水銀研究の貴重な情報の国内外への発信を目指し、多数の研究成果を発表するとともに、国民の健康保持にかかる提案、活動を行ってきた。また、地球規模での汚染拡大が危惧される中、現地での調査研究や普及活動に取り組んでおり、氏の国際的な評価、信頼は極めて高く、公務の信頼と向上に寄与している。